

## グループ通話アプリに死角はないか？

グループ通話アプリ(以下アプリという)が使用されて一か月がたった。東京駅で折り返し運用の列車では座席汚損発生時に威力を発揮しているようだ。リアルタイムに連絡が取れるのは便利である。しかし、これは通常乗務の事であり、異常時にその真価を発揮しているのか・・・実際にあった事柄でアプリの有効性を見てみたい。

夏季輸送期間中、上り列車で急病人が発生した。アプリには車掌・運転士・MG・SG・指令が接続し、情報共有と指示が飛びかった。異常時だから通話後の切り忘れも重なったせいもあると思うが走行中の通話では輻輳し**タイムラグ・途切れ・ハウリング**などが多発した。急きょPHSも使用して臨停扱いのドア開扉の打ち合わせをするなどで対応したが思うように連絡できないことにイライラしたという。

急病人降車の連絡でこの状態なら6月に発生した265Aの殺傷事件の状況下でこのアプリでは心もとない。

また、通話が一部途切れた時に「きつこうだな」と憶測で判断してしまう恐れがあることだ。鳴り物入りで導入された異常時対策だがアプリの限界性が感じられる。

アプリが連絡体制の最優先方法としていいのか考える必要がある。

